

このたびの大西明さんのご逝去、心よりお悔み申し上げます。まさか彼の追悼を記すとは夢にも思いませんでした。悲しくて、くやしくて、やり切れません。

大西さんとは十代の頃から40年来の友人で、大西さんと同じ分野の研究をしています。友人と申し上げましたが、もし大西さんが生きておられたら恐らく「お前とは腐れ縁や」と笑いながら言い放ったでしょう。

大西さんとは、京大の入学時に知り合い、同じ科学系サークルで青春の日を過ごしました。理学部の最初の本格的な研究課題である「課題演習」でも、故玉垣良三先生の下で同じ研究班でした。大学院では5年間、同じ研究室の釜のメシを食い、大西さんは堀内昶先生らと「複雑な原子核反応に対するコンピュータを用いた数値的な精密計算」という新しい流れを作り、私も新しいジャンルの研究を行い、ともに切磋琢磨し楽しく過ごしました。最終年度の大晦日には、やはり同期の福井さんの下宿にて、博士論文を書きながら3人で年を越しました。

その後は別の経路をたどりますが、ここ15年は、同じ京都大学で教鞭を取り、同じ分野の研究を進める同志であり戦友でした。そんな感じで、いつだって一緒にいたように思います。

大西さんは、とても明るくまぶしい存在でした。スマートで、スタイリッシュで、エネルギッシュで、時にはお茶目なエンターテイナーで、話術は優れ、人を魅了する。研究ではいつだって難業にチャレンジし、重要で新しい潮流を幾つも生み出してきました。責任感が強く、多くの学生たちをしっかりと育成し、理論物理学の広い領域に多大なる貢献をしてきました。そして何より、明るい家庭を築き、奥様とともに、立派な息子さんを育て上げてきました。

大西さんはとても優しい人でした。よく気がつく人で、病気がちな私や何人かの先輩後輩たちの健康にも細やかに気を遣ってくれました。本当に心配してくれました。学生への気遣いも繊細で、亡くなる4日前の5月12日にも、彼の指導する院生の神野君が、返済義務なしの奨学金である京大フェローシップに採用されたのですが、その際にも大西さんは、いま思うとそんな状態じゃなかっただろうに、つらい病床から院生と私に「よかった」とメールを送ってくれました。それが彼からの最後のメールになりました。

大西さんには、元気になって欲しかった。研究は十分にやり尽くしたでしょうから、ゆっくりとした時間の中でも、ご家族と楽しく生きて欲しかった。

大西さんは、太陽のように明るく、まぶしく、力強く、それでいて暖かく、楽しい人でした。私は、こんなに素晴らしい人と同じ時を過ごせて幸せでした。これからは私たちの心の中で生き続け、時には叱咤し、時には励まし、見守ってください。

大西明さん、本当にありがとう。

菅沼 秀夫（京都大学 理学研究科 物理学第二専攻）